

日本における文字の未来について

The future of Japanese calligraphic characters

代表 白 崎 みなみ^{*1}

金子ひかる・桐木千夏・楠見遼太郎・小竹光夫^{*2}

杉浦佑奈・田口太智・大仁寛明・前田直哉

山田雄大（代表者白崎以外の執筆者については、50音順に並べた）

要旨：加速する情報化の中で、我々が使用する文字や言語はどのような変容を遂げていくのであろうか。溢れかえる情報の中、何が正しく、何が間違っているのかさえ不透明な混迷の時代でもある。しかし、単に「時代なのだから」という表現で時間の流れに身を任せているだけでは、何一つとして確実なものを見出すことはできない。本論は、書写書道ゼミに所属する中の、研究グループによる共同研究である。一人ひとり是非力ではあるが、与えられた課題に取り組み考える中で、そんな文字や言語の未来像の一部分でも垣間見ることができれば、進んでいく道のりの指標とはなっていくはずである。

かつて来たるべき100年後の未来について、数々の論議が交わされた。そんな遙か彼方の未来を論じる力量はないものの、周辺を観察する中から、10年後や20年後の日本の文字や言語の未来像について論究し、提示することとした。

キーワード：日本の文字や言語、未来像、書写書道教育

^{*1}書写書道ゼミナール3年生研究グループ ^{*2}奈良学園大学人間教育学部教授

はじめに

20世紀を代表する文豪司馬遼太郎が、小学校用教科書のために書き下ろした作品「21世紀に生きる君たちへ」と「洪庵のたいまつ」は、対象となった小学生だけでなく、我々に対しても大きな示唆を与えるものであろう。歴史小説を書き続け来た司馬遼太郎が、膨大な歴史という時間の隙間から語りかける一言一言は、「人間として如何に生きるべきか?」という清冽な問い掛けであるとともに、我々に「考えるという行為」を求め続けている。

私の人生は、すでに持ち時間が少ない。例えば、21世紀というものを見ることができずに違いない。

君たちは違う。

21世紀をたっぷり見ることができるばかりか、そのかがやかしいにない手でもある。

そんな司馬遼太郎の思いを受け取りながら、考える我々は非力である。哀しいほどに非力である。しかし、非力である我々が一人一人の力を結集すれば、僅かでも日本の文字の未来を覗き見ることができるかも知れない。そう考えて、本共同研究の論を立ち上げることにした。

(担当 小竹光夫)

I 「未来への予見」について

「日本の文字の10年後」という課題を受け取った山田雄大は、「先のことなんてわからないと思いながら書いた」との付記を添えながら、レポートを提出している。確かに自らが想像する範囲で未来を予見するならば、それは単なる「空想」でしかなく「明日のことなど分からない」となるのだろうが、それでは余りに刹那的であるし、特に人間教育学部という教員養成を主眼とする課程に学ぶ者としては極めて不十分である。なぜなら、明日や将来への見通し、つまり予見すらない教師が、どんな未来予想図の元で児童生徒を教育しようというのか、という指摘に対し、無言のまま立ち

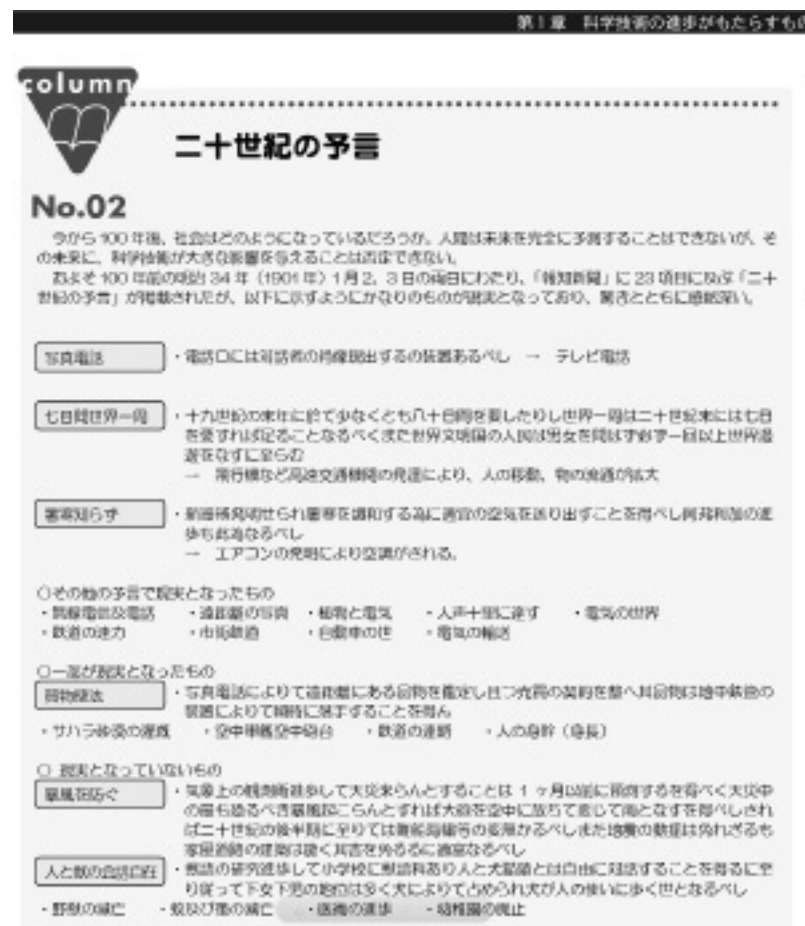


図1 文部科学省『平成17年度版 科学技術白書』より抜粋

尽くす以外ないからである。

『報知新聞』は1901年1月1日より20世紀説をとっており、1月2日～3日の記事において、「二十世紀の予言」として23項目にわたる「予見」を掲載している。それらの一つひとつは、単なる「空想」の域を越え、確証あるデータを元にしながら「予見」として提示されている。その正確性につ

いては、文部科学省の『平成17年度版 科学技術白書』においても、「以下に示すようにかなりのものが現実となっており、驚きとともに感銘深い」と評価されている。

未来を予見するという行為は、少なからず人の興味関心をそそるものであり、横田順彌著の『百年前の二十世紀』にも、幾つかの事例とともに紹介されている。その中でも特に我々に大冊として衆知されているのが、『百年後の日本』であろう。

『百年後の日本』は、大正9年に『日本及日本人』の増刊として出版され、現在もお復刻版を入手することができる。前述の『百年前の二十世紀』において、横田は次のように述べている。

この特集は、編集部から当時のあらゆる分野の著名人250名に対して、百年後の日本はどうか、というアンケートを求めたもので

あるため、答えに統一性がまったくなく、分野別にまとめて紹介することができない。

確かに通覧する限り立場は千差万別で、真正面から真剣に考えているものもあれば、答える気もしないという論調のものまでが混在している。ただ、この時代に島崎藤村や正宗白鳥、菊池寛や室生犀星等々の識者が、妙に真剣に未来を垣間見ようとしていることを知るにつけ、興味深く学ぶことができる一冊であると位置付けられる。

図2の「百年後の日本文字」は、



百年後の日本文字（『百年後の日本』編輯より、大塚謙の画）

図2 百年後の日本文字

『百年後の日本』の挿絵として掲げられているものであるが、「すべて横行（に）書く 書体著しく英字化す」との注が添えられている。一種の洒落なのか、封書の差出人が「大馬鹿三太郎」と読み取れるのは御愛嬌とでも言うべきものであろう。ただ、横書き主体となるという現状を、この時代に言い当てている優れた「予見」と位置付けることができよう。

以上述べてきたように、「予見」は「空想」ではない。少なくとも現状を子細に観察し、それらを元にしながら積み上げられていくものである。だからこそ、我々はその「未来への予見」を念頭に置きながら、生き抜いていくことを求められているのである。

（担当 小竹光夫）

II 「未来への予見」を紡ぎ出す要因

1 インターネット時代の若者の伝達手段

「文字を書く」ではなく、既に「文字を打つ」という時代である。一般的に情報化時代とは言われるが、我々若者に馴染み深いのは、「インターネット時代」という表現であろう。

通学の電車の中で周囲を見回すと、乗客の大半がスマートフォンの画面を覗き込んでいる。ただ見入っている人もいれば、せわしく指を動かし続けている人もいる。ネットをさまよっているか、あるいはゲームに興じているのだろうか、いわゆる「ネット依存症」という言葉がささやかれる現実を目の当たりにする思いである。自分自身がネット依存であるとは思わないが、インターネットなどで調べものをしていて、「もうこんな時間か」と驚くことがある。つまり、文字を書いたりする労力を必要とせず、情報を受け取ることができるという安易さが、時間の経過を忘れさせてのめり込ませる原因ともなっているのだろう。そんな、知らず知らずのうち

に時を過ごしている」という場面は多い。

いわゆるネット依存症の種類としては、6つの種類が挙げられている。

①検索依存症

②オンラインゲーム依存症

③掲示板・動画サイト閲覧依存症 ④SNS依存症

⑤チャット依存症 ⑥LINEやメール依存症

この中でも代表的とされているのが、②と⑥である。当然のことながら、ネット依存の問題点として、身体的な影響、学業や仕事における影響、金銭的な影響が挙げられる。電源を落とさない限り稼働し続けるPCやスマートフォンと違い、人間には疲労やダメージという身体的・精神的な負荷がつきまとう。確かに即座に情報を手に入れることができるネットは、非常に便利なものである。しかし、裏を返せば危険なこともたくさんあるということにもなる。既に単なる通信機器としての機能だけでなく、明らかに高度な情報端末となっているスマートフォンを手にしたとき、それらの功罪を見極めながら、利用していくことが必要であろう。

「書く」が「打つ」に替わり、「書く」ことより「読む」ことが優先される時代、これまでの文字活用の在り方をそのまま受け継ぐのではなく、新しい時代の活用方法と心得が必要になっていると思う。

(担当 前田直哉)

2 筆文字の存在

我々若者には理解できないことも多いが、一定年齢以上の人たちの筆文字への思い入れは大きい。伝統や歴史という深い部分への理解があるかどうかは不明だが、少なくとも「日本的なもの」の象徴のように扱われている。

そんな思いから、「街で見かけた筆文字」を幾つか拾ってみた。

図3…御菓子司「三日月」

「御菓子司」との表示がある。木目調の背景に、落ち着いた行書で「三日月」と書かれている。掲げられた暖簾や掲示物も、総てが「和」に統一され、歴史を感じさせるには充分である。



図3 御菓子司 三日月

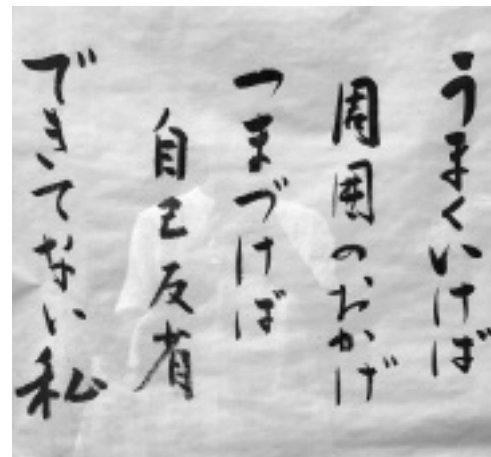


図4 門前の教え

図4…うまくいけば

教訓、戒めの言葉だろうか。寺社の門前などには、こんな言葉がよく掲げられている。軽快な書きぶりだが、筆文字ということもあって、読む上での「呼吸」のようなものを感じさせる。

企業家松下幸之助の言葉に似たようなのがあったと思って調べてみたら、『成功者の方は、上手くいった時は運が良かった。悪いときは努力が足りていなかった。』と言われる人がほとんどです。自分としっかりと向き合い、弱さも強さも知っているからこそ、周りに感謝しています。上手くい

けば周りのおかげ、上手くいかないときは自分のせいなのです。この考え方を持つことで周囲にも応援してくれる人が増え、さらに成功しやすくなるのではないのでしょうか。」とあった。筆文字探しをしていて、自己啓発された。しかし、考えてみると、これも筆文字の効果なのだろう。

図5…たこ梅

まず、読めない。横に掲示されているお品書きを頼りに読んでみると、



図5 たこ梅

どうも「たこ梅」と読まれるらしい。「こ」は「古」の草書体、「梅」も同様の書き方で、若者には読めない店名ということになるろう。「古」の表示は、聞けば「変体仮名」というらしい。

一番気になったのは、「たこ梅」でなく、「梅こた」という、現代とは

逆の書き進み方になっている点であった。これまた、「本来、日本語には横書きがなく、横書きに見えても縦書きの書式に則っている」と言われて納得した。つまり、縦書きの第1文字目のみを取り出したと想像すれば、右から左への展開となる。

「準備中」なのに、店内に客がいる。「ツッコミどころ満載」の不思議な店だと思ったが、日本酒などを提供する居酒屋としての雰囲気を感じさせるには充分なたたずまいだった。

文字というものを単純に考えれば、必要なのは骨格だろう。しかし、その骨格に強弱や太細、速度を加えることができる筆文字は、装飾性の高い活用がされていると言える。さらに、格調という点での効果も高い。ただし、この多くの情報が流れる時代の中で、筆文字が実用的かと問われると、「否」という回答しか用意できない。

(担当 楠見遼太郎)

3 外来語・カタカナ語の氾濫

公用文がA4の横書きと決まって以来、文章を横書きで書いたり、横組

みで打ったりすることが急激に増えた。そのため、漢字と平仮名・片仮名を交ぜ書きしていた頃とは異なり、英語やカタカナ表記の外来語も増加の一途を辿っている。

そんな外来語表記の典型は、身近にあるファッション雑誌などであり、我々若者でさえ知らないカタカナ語も登場する。一例を挙げれば、

アクティブ…元気で、活気のあるさま。よく動き回るさまという意味。

レイヤード…層をなした、重ねられたという意味。

マニッシュ…女性が男性的な装いをするスタイルという意味。

ヘルシー …「健康的な」を意味する。

などであるが、最後の項目の「ヘルシー」などは、単なる食べ物だけを指すのではなく、ファッションの域にまで拡大して用いられる。つまり、雑誌等で使われているヘルシーファッションとは、素材にこだわったシンプルなスタイルのことを指す。

一方、ファッション誌等とは異なり、一般の政治や学術的な部分にも、このカタカナ語は登場する。3年生になり、身近に体験するであろう「インターンシップ」という言葉一つをとってみても、どう訳せばいいのかと戸惑う。調べれば、「学生が企業で体験就業すること」とあったが、一々を訳して使うより、そのままインターンシップと言う方が簡単である。他にも、ニュースでよく聞く「コンプライアンス」や「インセンティブ」など、理解できた振りはするものの、実のところ全く分かっていない。他にも「モラルハザード」や「コンセンサス」、「アウトソーシング」や「ディスクロージャー」、「ディファクトスタンダード」や「パブリックコメント」となると、さらに困惑するだけとなる。自分自身がスポーツ系クラブに所属していることもあり、「ルーチン」や「ドラフト」、「リスペクト」や「イニシアティブ」などは何となく理解できる。

実のところ、この「何となく理解できる」というのが一番の問題で、厳

密な言葉の定義がなされない、あるいは定義が難しいものを、そのままカタカナ書きして分かったような気になって過ごしているのかも知れない。「ちょっとおしゃれな感じがする」や「言葉としての響きがいい」というファッション雑誌ならともかく、後半の一般の政治や学術的な部分での、いわゆる「アバウトな理解」は情報共有という点では大きな問題となるのではないだろうか。

極端な場合、ほぼカタカナで埋め尽くされている文章を見て、本当はよく知らないことでも、カタカナを使っていれば賢く見える部分もあるのだろうと思う。しかし、使いすぎれば内容は理解できなくなる。我々が、今後どのようにカタカナ語と向き合っていくべきかを考えさせられる。そんな現在の状況である。

(担当 桐木千夏)

4 不変のもの

これまで「インターネット時代の若者の伝達手段」、「筆文字の存在」、「外来語・カタカナ語の氾濫」と我々の周辺の文字・言語文化について述べてきたが、いずれもが変化を予想させるに十分なものである。しかし、変化するものばかりかと言うと、決してそうではない。例えば、伝達記号としての文字そのものに変化が起こるかと言うと、そのことについては否定的な事柄が多い。

日本語は、漢字仮名交じり文を基本の日常表記としている。現在は漢字平仮名交じり文が主であるが、平仮名が一音一字に統一されるまでは、漢字片仮名交じり文が日常的に行われていた。つまり、この漢字と仮名(平仮名・片仮名)、数字を交ぜ書きするのが日本語の基本形態である。

文字一つひとつに意味を持つ表意(表語)文字である漢字は、表音文字であるアルファベットを使う西洋的文化には理解できない難解な文字として位置付けられている。紀田順一郎による『日本語大博物館—悪魔の文字

と闘った人々』の第一章冒頭では、それらのことについて、

いまや写植の普及につれて、活字そのものの影はますます薄くなるように感じられるが、コンピュータによる言語処理は、文化史的に見れば「悪魔の言語」としての日本語をねじ伏せ、征服する努力の一つに過ぎない。電腦文化がようやく広がり幅を見ようとしている今日、これら先人の努力、あるいは失敗の跡を振り返ることも無駄ではないであろう。いわば悪魔の言語としての日本語とさまざまな角度から取り組んだ人々の苦闘の跡を、ハード、ソフトの両面から掘り起こそうとするのが本書の目的である。

と述べ、漢字、つまり「悪魔の文字」との戦いの跡を詳細に記している。

微細なアクセントの違いで意味を違える、つまり同音異義語を数多く抱える日本語においては、負担制限のために考案されたカナ文字運動やローマ字国字論も、結果として効果を示さないままに終わった。

『ことば・文章 効果的なコミュニケーション』において、安本美典は、漢字使用度の変遷をまとめながら、漢字の将来について次のように述べている。

このデータに、もっともうまくあてはまる直線をもとめて、漢字の将来を予測するならば、あと220年後、すなわち、西暦2190年ごろには、小説の文章中に用いられる漢字の率は、零となってしまうこととなる。すなわち、かりに、これまでのような傾向で漢字がへっていくならば、220年後には、文章はかななど、表音文字ばかりで書かれることとなり、漢字は滅亡してしまう可能性がある。

この安本の主張は、「漢字滅亡論」としてまとめられていくが、その中で「但し」として安本が書き加えたのは、「押し止めようとする力が働かない限り」という一文であった。つまり、前述の同音異義語等が多い日本語の特性、さらには画数の多い漢字が情報機器に載せられることによって書く負担から解放されたこと等が、この「押し止めようとする力」と

第2図 年月の経過による漢字の使用度の変化

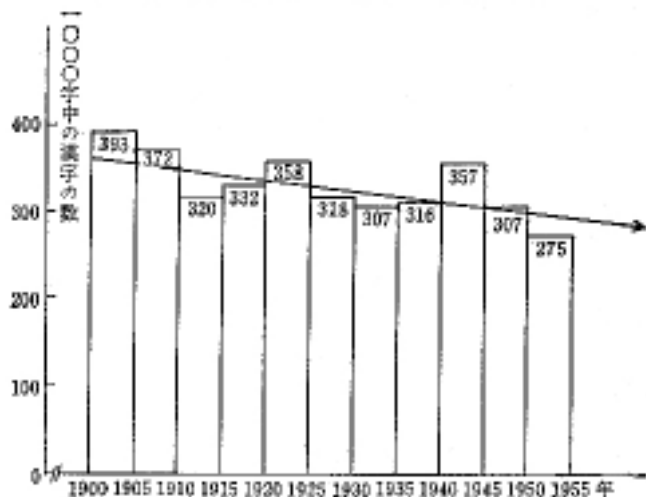


図6 年月の経過による漢字の使用度の変化

なったことは明らかで、現在の情報化の中で、漢字の使用率は逆に向上している。

人間には、行動を支える主たる利き手、利き足がある。昨今、左利きの児童生徒等々の増加が言われるが、その数は全体の1割程度に過ぎない。大まかに言えば、「世の中は右利きに適するよう構成されている」と言っても過言ではない。当然、左利きの人間、特に左手書字の人間にとっては困難が待ち構えている。

一般的に日本語で使う文字の横画の書き方は、左側を始点として右に線を引くという動作で書かれる。右手で書くときはスムーズにペンを動かすことができるが、左手で書くときには押し出す動作となり、動かすのは難しい。また、字形を整える際の約6度の右肩上がりも、左利きには難しい。このように基本的な運筆が右利き文化の中で作られたと考えられるが、それに伴う筆順も左利きには困難を伴う動きとなる。但し、これらは「書く」という動作の中での問題点であり、「書く」から「打つ」へと変わって

く情報化の中では、さほどの問題点とも考えられないまま、あるいは固定したままに推移していくのではないと思われる。

(担当 田口太智 大仁寛明)

Ⅲ 話し言葉と融合し、言葉は力を発揮する

1 街で見かけた印象的な言葉

図7として掲げた「私は主役になれないと、思っていないか？ ここには君たちが輝く舞台が必ずある。日本航空高校に脇役はいない。」は、現在、自分自身が本学で所属しているバスケットボール部の遠征で訪れた、日本航空高等学校（山梨県）に貼られていた言葉である。語りかける言葉は、試合で活躍している選手たちが全てではなく、それぞれの立場で輝ける場所を作ることができるということを考えさせた。試合での出場時間が少ない私たちにも、試合以外の場所でチームの支えとなることができる。そう感じた。



図7 日本航空高等学校のポスター

もちろん、言葉自身の素晴らしさはあるが、それが文字として、このようなポスターとして目の前にあると、訴えかけてくる力は倍増する。ビジュアルという言い方は曖昧であるが、言葉が視覚効果を持つと重さが増す。特に我々のような若者には、こういう訴えかけは強烈である。

同様に、トヨタ紡織（愛知県）の体育館に貼られていた「毎日少しずつ進歩していけば、やがて大きな収穫が得られる。そのようにして身につけた進歩は 着実に自分のものになり、失うことはない。このことが、進歩するためには、確実に唯一の方法である。」も印象的な一枚であった。大きな目標を達成するために、地道な努力を重ね、着実に自分のものにすることが大切であること考えさせられた。

印象的な言葉は自分の中に留まり、繰り返し、繰り返し問い掛けてくる。それは単なる言葉としてだけでなく、視覚的な効果が加わることによって力を増す。世の中に話し言葉と書き言葉という区分があるが、このように日常的な話し言葉が文字化されたとき、本を読んでいるような感覚ではなく、ごくごく身近で話し掛けられているような、そんな親しみのある感覚が湧いてくるのである。

（担当 杉浦佑奈 金子ひかる）

2 文字になったときの言葉の力、恐ろしさ

昔から、コミュニケーションツールの一つとして言葉は使われてきた。その言葉が形としてフリーズし、文字が形成された。一過性の言葉と違い、記録化されるという点で文字はさらに便利なコミュニケーションツールとなった。情報化が進む現代の日本では、パソコンや携帯電話に文字の形が残ることも多くなった。便利である反面、文字が残ることで様々な問題も起きている。前段でも言葉が文字となったときの「威力」について述べているが、今一度、文字になったときの言葉の力や恐ろしさについて、ここでは考えておこうと思う。

簡単に言えば、文字とは言語記号である。口頭の音声言語に対し、文字言語は後発的なものであり、それだけに人間の知恵や工夫が込められている。何よりも文・文章となった場合には、論理性が増すとも言われる。ただし、言った言わないという話し言葉のレベルでなく、文字化された文・文章は一人歩きを始め、予想だにしない理解をされる場合がある。「威力」であると同時に、責任を問われる恐ろしさが生まれる。よく目にする政治家の記者会見や対談などは、その場で瞬時に発言を求められるためか、後刻、「失言」として指摘されることも多い。「失言」が話し言葉特有の問題点であるかという点、決してそうではないだろう。文・文章での「失言」も皆無とは言えない。結局は、取り組むときの用心深さなのかとも思う。ただ、文字として残ってしまえば、いつ読み返されるか分からず、それを証拠のようにしながら、まるで真実のように広がってしまう可能性は高い。その危険性を、少なくとも我々は知っている。「人の噂も」ではないが、いつかは消えてしまう話し言葉と違い、形あるものとして残ってしまう文・文章については、客観的な推敲という行為が加わったり、慎重な言葉選びなどがしたりして、「用心深く取り組む」という姿勢を示さなければならぬことになる。

繰り返して言うが、口から出る言葉は人と人とを繋ぐ便利にツールである。それが文字の形をとったとき、さらに時間や空間を越えて人と人を繋ぐ便利なツールとなった。しかし、便利というだけで安易な使い方をしていると、眼前の人だけでなく、見たことも会ったこともない人までも傷付けてしまうという危険性を持っている。換言すれば、人間は言葉という便利な「火」を持った。その「火」は数多くの知恵や工夫を生み、世の中を進化させた。ただし、「火」は「文明の光」となる場合もあれば、逆に人を傷付ける「武器」にもなる。この二面性をしっかりと意識しておかなければ、言葉の活用を充分に行うことはできない。特に、「書く」という労力を必要とせず、簡単に打って文字化できるようになった情報化時代にお

いては、細心の注意を払いながら活用していく必要がある事柄だと考える。

(担当 白崎みなみ)

IV 日本の文字文化の10年後について…6の予見

冒頭に掲げられてしまっているが、担当部分を書き記す際、「先のことなんてわからないと思いながら書いた」というのが正直な所である。しかし、各人が担当して書き綴ってきたもの読むにつれ、僅かではあるが「先」が見えてきたように思う。

最も簡単な第1の予想は、「縦書きが消え、大部分が横書きとなる」ということだろうか。カタカナ書きの外来語だけでなく、英語等々を交ぜ書きする必要性から考えれば、縦書きは不向きな書式である。学校教育の現場でも、主に漢字と仮名を用いて日本の文字文化について触れている国語や書写のみが縦書きで、それ以外の教科目は総てが横書きとなっている。新聞や小説などの読解を求める文・文章は縦書きが守られているようであるが、携帯小説では既に横書きであるし、何より国語辞典でさえ横書きのものが登場し、我々の「常識」を覆しつつある。「横書きの文章は読みにくい」との意見もあるが、ある意味では「慣れ」の感覚といえよう。

第2は、「書く」ことの喪失による再現率の低下であろう。再現率とは、脳内に定着している文字のイメージを、紙面に書き表す際の成功率を指す。漢字や英語の場合も、これまでは手書きする行為を繰り返し、習得を図ろうとした。つまり、運動との連携の中で文字は定着してきた。しかし、「見て学ぶ」や「打つ」という時代になり、この連携が失われ、自分の手で正確に書き示すことが不可能となり、画の増減や、外形のみが類似した誤字が数多く登場してくる。特に書く過程で求められてきた筆順の正しさは、瞬間的に字形を提示する機器文化の中で曖昧になっていく。

第3は、使用される漢字数の増加である。打てば変換するという便利さから、書くことはできないが使うことはできる漢字が多用され始める。例

えば、「ひんしゆく」と入力して変換キーを押せば「翬蹙」となる。この熟語を、何人が手書きで書き表すことができるかは疑問である。現在、小学校で学ぶ漢字は1006字であるが、インターネット等を活用すれば、小学生でさえ数多くの漢字に出会うことになる。「読めるが書けない」という状況は、さらに加速する。

第4は、基本的に漢字・仮名ともに字形の変化は生じない、ということである。常用漢字の変更でさえ賛否両論が渦巻く日本では、文字改革などは不可能であり、まして活字（印字）によって、左手書字の増加で言われる書きにくさも問題とはされず、字形は固定したと短絡的にはあるが信じられてきた。ただし、活字（印字）によって示される字形と、各個人が手書きする文字の字形の相反は、さらに加速する。縦書きの際は左展開、横書きの際は右展開という交差する違和感ある方向性も、情報機器に載せやすいという点で今後も変更は加えられないであろう。

第5は、日常での毛筆文字の使用が極めて限定的なものになる。毛筆という用具への思い入れは強く、総てがワープロによって印刷されている冊子などの表紙に、わざわざ毛筆の題字が載せられている例などを見るが、結局はデザイン上の装飾のようなものでしかない。看板や掲示にしても、このような形で毛筆文字は残るだろうが、多くは芸術的な書道の部分に重点が行き、国語科書写では硬筆が中心となり点画の要領や技術習得のための毛筆使用に限定されるということになる。

第6は、葉書や手紙という書き言葉中心のコミュニケーションが減少し、文字を使うとしてもメールやLINEといった情報機器を介した交流となる。「作文は苦手だが、メールなどは時間を忘れて打っている」と言われる。まるで日常会話のように話し言葉で打ち続けている（対話し続けている）のだから、文字を書く際の字形等も気にする必要もない。電話の内容そのものが文字の形として打たれていると言っても過言ではない。直接的な対話に近い言葉や文・文章は、論理的な書き言葉以上に人の心に突き刺さる

ものである。功罪を考えれば、不用意な発言も増加し、失言やいじめ等々の事象が社会的問題となってくるだろう。

以上、「日本における文字の未来」という標題の元、研究グループ一人ひとりの意見を、「日本の文字文化の10年後について…6の予見」としてまとめた。研究というものの入口に立ったばかりという状態での執筆である。不十分なことも多々あると思うが、今後、さらに豊かな視点を身に付けながら研究を深めていきたい。

(担当 山田雄大)

【引用・参考文献】

『平成17年度版 科学技術白書』文部科学省（2005）

『対訳 21世紀に生きる君たちへ』

司馬遼太郎著 ドナルド・キーン監修翻訳 朝日出版社（1999）

『百年前の二十世紀』横田順彌著 筑摩書房（1994）

『ことば・文章 効果的なコミュニケーション』

波多野完治編 芳賀純・安本美典著 大日本図書（1972）

『日本語大博物館－悪魔の文字と闘った人々』

紀田順一郎著 ジャストシステム（1994）